宣教の拡大、
アンティオキア教会の設立

使徒言行録11章19～26節
2022年6月26日
松田 基子 師

私達は何故イエス・キリストを信じているのでしょうか。 イエス様は地上の業を終えて、天に帰られる時、弟子達に、使徒言行録1章8節で、

「**あなたがたの上に聖霊が降ると、あなた方は力を受ける。 そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至まで、わたしの証人となる**」

と言って永遠の世界に帰って行かれました。
聖霊を受けた弟子達は、権力者達を全く恐れる事無く、2章32節で、

「**神は十字架に架けられたイエスを復活させられたのです。 わたしたちは皆、そのことの証人です**」

と大胆に語りました。 弟子達はこの様に、イエス様の復活の証人でした。 しかし、その意味は

『人間は誰も復活した事がないのに、イエス様は復活されたのです。 だから人間以上の力あるイエス様を信じたら、困った時には助けて貰える。 だから信じなさい』

と言ったのではありません。

ペトロは、ペンテコステの日の説教で語っています。 使徒言行録の2章22節で、

「**ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方です**」

2章30節に、

「**ダビデは預言者だったので、彼から生まれる子孫の一人をその王座に着かせると、神がはっきり誓ってくださったことを知っていました。 そして、キリストの復活についても、前もって知り、**

『彼は陰府に捨ておかれず、その体は朽ち果てることがない』」

と語り、続いて36節に、

「**だから、イスラエルの全家は、はっきりと知らなくてはなりません。 あなた方が十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです**」

と言っています。

何故イエス様を信じるのか、それは、

『神様が定められた世界の主、**真の**メシア・**救い主だから**です』

ペトロはユダヤ議会に対して、使徒言行録4章11節で、

「**この方こそ、**

『あなたがた家を建てる者に捨てられたが、隅の親石となった石』

です。 ほかのだれによっても、救いは得られません。 わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです」

と言いました。

2章38節では、人々に対して、

「**悔い改めなさい、めいめいイエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。 そうすれば、賜物として聖霊を受けます**」

と勧めました。 **イエス様**は、神様から**世界の主メシア・救い主**とされたと言う事は、人間の**罪を赦し**、死を超えて、**永遠に**於いてその**存在を**、

「**大丈夫だ**」

と、**保証してくださる**お方だと言うことです。
私達がイエス様を信じ、自分の**全存在を委ねる根拠**は、**ここにあります**。 神様の御計画は全世界に、このイエス・キリストによる救いの福音が伝えられる事でした。 弟子達は聖霊の助けにより、大胆に、イエス・キリストの証人となって語りました。 多くの人たちが仲間に加わりましたが、イエス様を十字架に付けた宗教指導者達と彼らに追随する、律法による伝統社会に固執する人々は、イエス様を信じる者達を攻撃迫害しました。

彼らは特に、外国育ちのディアスポラと呼ばれる、離散のユダヤ人で、イスラエルの律法社会を、客観的な目で見て、その信仰を鋭く批判した弟子達に対して、特に反感を抱きました。
その標的になったのがステファノでした。
ステファノは彼らの攻撃の的となり、石打の刑を受けながら、自分を殺害する者を執り成しつつ、

召されて行きました。 反対者達は、ステファノ1人の殺害では気が収まらず、使徒言行録8章1節を見ますと、

「**その日、エルサレムの教会に対して、大迫害が起こり、使徒達のほかは皆、ユダヤとサマリアの地方に散っていった**」

とあります。

続いて、11章19節を見ますと、

「**ステファノの事件をきっかけにして、起こった迫害のために、散らされた人々は、フェニキア、キプロス、アンティオキアまで、行ったが、ユダヤ人以外の誰にも御言葉を語らなかった**」

とあります。 何と彼らは迫害を逃れながらも、聖霊に力づけられて、**同朋に**イエス様の**救いを告げた**のです。

彼らが逃れて行ったフェニキアは、イスラエルを出て、地中海沿岸部を北に延びた所です。キプロスはフェニキアの北西部にある、地中海の島です。 フェニキアから更に北へ進んだ所に、アンティオキアがあります。 イスラエルのカイサリアからは約480キロの地点です。アンティオキアは、元々は古代シリア王国の首都で、地の利を得て繁栄した都市です。西に小アジアからローマへ続く道、東にメソポタミヤへ、南にはパレスチナ、エジプトへと繋がる交通の要衝でした。 陸路ばかりでなく地中海岸にはセルキア港を有し、東西貿易の中継地として栄え、そこはまた、東西の文化を謳歌出来る都市でした。 それだけに異民族も共生できていました。 その繁栄は、紀元前63年に、ローマに占領されてからも変わる事なく、属州シリアの州都として、栄えました。 ローマ帝国内に於いて、ローマ、アレクサンドリアに次ぐ3番目の大都市であり、東方の女王と言われました。

そのアンティオキアには、以前からユダヤ人の大きなグループがあったとされています。 彼らは繁栄の地にいて、豊かでもあったようです。アンティオキアへ、エルサレムの迫害から逃れて来た人の多くは、イスラエル本国育ちと言うより、ディアスポラの離散民でした。 彼らの特質は、地中海世界と言う、広い外国の世界を知っていたこと、地中海世界の公用語である、ギリシャ語が話せた事でした。 イエス・キリストが世界の主、真の救い主である事を伝えたくても、言葉が通じなければ伝える事が出来ません。 ディアスポラはその点、外国人に対する拒否感や言葉の壁がありませんでした。

11章20節を見ますと、

「**彼らの中に、キプロス島や、キレネ**(地中海の南岸でエジプトの西側)**から来た者がいて、アンティオキアへ行き、ギリシャ語を話す人にも語り掛け、主イエスについて福音を告げ知らせた**」

とあります。 この人達は何か特別に伝道する訓練を受けた人たちではありませんでしたが、 彼らはイエス・キリストを信じ、洗礼を受け、聖霊によるイエス様のとの交わりに入れられると、心の底から喜びが沸きあがって来て、誰かにその喜びを分かち合わずには居られませんでした。彼らは喜びを語るのに何も、律法に縛られて、同胞にしか福音を語れないというのではなく、臆せず異邦人にも語りかけました。

聞いた人々の反応はどうだったでしょうか。21節を見ますと、

「**主がこの人々を助けられたので、信じて主に立ち帰った者の数は多かった**」

と記されています。 その事は何より、イエス様の喜びでした。 イエス様は聖霊を通して、

『ご自身が真の救い主、人の罪を赦す権威を持ち、ご自身を信じる者を、永遠の滅びにわたす事なく、その存在をご自身の許で永遠に保証してくださる』

との確信を、1人ひとりにお与えになりました。

彼らは喜び合って、主にある交わりを持っていました。 22節には、

「**このうわさがエルサレムにある教会にも聞こえた**」

とありあます。 既にエルサレム教会では使徒ペトロを通してカイサリアのローマ軍の百人隊長

コルネリウスとその家族及び知人が救われ、聖霊が降った事に付いて証言があり、異邦人にもイエス・キリストの救いが与えられると言う事を確認していました。 しかし、エルサレム教会は、何と言っても**そうそうたる**使徒達の集まりです。
彼らは何も、人間的な権威を振りかざす人たちではありませんでしたが、**イエス・キリストの救い**の福音が**潤色**されずに**正しく伝わって**行く事を監督する**責任を**負っていました。

そこで、エルサレム教会は、バルナバをアンティオキアに派遣しました。バルナバは適任でした、彼自身ディアスポラで、キプロス島の出身でした。 使徒言行録4章36，37節を見ますと、

「**レビ族の人で、使徒達からバルナバ**
（慰めの子）**と呼ばれていた。 キプロス島生まれのヨセフも、持っていた畑を売り、その代金を持って来て、使徒達の足元に置いた**」

とあります。 彼はレビ族の出身と言うのですから、本来は律法を伝統的に守る祭司の家系に属していた人です。 その彼が、 何故イエス様を信じるようになったのでしょうか。 考えられる所によりますと、彼はヨハネ・マルコの従兄弟に当たり、マルコの母とも親類関係にありました。
マルコの母は、バルナバより先にイエス様を信じ、エルサレムに大きな家を持っていたことから、イエス様を迎えて集会をしていたようです。
イエス様と弟子達の最後の晩餐のために、また、イエス様昇天後の弟子達の集会のために、マリアの母の家が提供されました。

マルコの母はイエス様が語られる時、当然、バルナバを呼んで、信仰を薦めたに違いありません。 バルナバはイエス様に直接触れ、また、イエス様の十字架も見守ったと推測されています。 彼は無欲な人で、エルサレム近郊に、先祖からの土地を持って居て、それを売り、教会に献げ、貧しい人の助けとなった人です。
バルナバはまた、純真な心で、イエス・キリストを愛し、友を愛する人でした。

使徒言行録の9章26節から30節を見ますと、イエス様の弟子達を迫害した、サウロは回心して、キリストの弟子となると、エルサレムに行って、弟子の仲間に加わろうとしたのですが、弟子達はサウロを信じることが出来ないで、恐れて拒否しました。 そんなサウロに助けの手を差し伸べたのが、バルナバでした。 バルナバはその時、既にサウロを知っていたであろうと言われます。
二人ともディアスポラです。 曾て、同じ会堂に出入りした仲間であったであろうと推測されています。

9章27節、28節を見ますと、

「**バルナバは、サウロを連れて使徒達の所へ案内し、サウロが旅の途中で主に出会い、主に語りかけられ、ダマスコでイエスの名によって大胆に宣教した次第を説明した。
それで、サウロは、エルサレムで使徒達と自由に行き来し、主の名によって、恐れずに教えるようになった**」

とあります。 バルナバは、信仰、人格共に、イエス・キリストの真の証人であり、良き牧会者でした。 エルサレムの使徒たちは、アンティオキア教会に最も相応しい教師を送ったのでした。

11章23節には、

「**バルナバはそこに到着すると、神の恵が与えられた有様を見て喜び、そして、固い決意をもって、主から離れることのないようにと、皆に勧めた**」

とあります。 彼らにとって、イエス・キリストの福音は、これまで接して来た人間の願望に答える、人間の欲望の投影でしかない神々とは、全く性質を異にするものでした。 人間自身の罪が問われました。 罪の責任は重く、自分を永遠の滅びに引きずり込んで行くのです。 その、人間の罪を一身に負って、ご自身の身を十字架に贖いの犠牲として献げられたイエス様です。

贖いが成就したことの証明が、復活でした。
神様はこのイエス様に、罪の赦しの権限と、神の国の保証を、お与えになりました。 **イエス様**が**永遠の世界に帰られ、神の右の座に着かれた**ことが、それを**証明して**います。 心ある人々は
『**これこそ**、自分の**全存在を救う**、

唯一の真理だと信じました』
聖霊は信じる者の心に、その確証を与えられました。 生まれたばかりの教会は、その喜びに満ちていましたが、バルナバは、既にエルサレム教会の迫害を経験して来た者として、反対者の攻撃を予測しました。エルサレム教会への迫害で、信仰を無くした人々は、少なくなかったでしょう。

イエス様を信じる信仰というのは、一度決心したら、物を握ったように、失わないと言うのではありません。 何時もいつも日毎・夜毎、聖霊を求め、イエス様から離れないで、悔い改め、悔い改め、イエス様に寄り縋って行く生活です。
バルナバは、聖霊と信仰に満ちて、生まれたばかりの信徒さん達に、その事を強く勧めました。
バルナバの良い導きで、多くの人々が、主イエス・キリストの信仰に導かれました。 バルナバはそこで、教会の成長を考えた時に、最も相応しい人物を示されました。 それはあのサウロです。
サウロはバルナバの仲介でエルサレム教会とも交わりが与えられましたが、何しろ迫害者であったことは、エルサレム中、衆知の事でありました。

その彼が、
『十字架に架かった、イエス様こそ
神様が遣わされたメシア救い主です』
と訴えたのですから、反対者たちはサウロに殺意を抱きました。サウロの仲間は、彼の身を案じてサウロを故郷タルソスへ向かわせたのでした。

一方バルナバは、サウロの信仰、そしてその神学的見地の豊かさを知る人でした。
『サウロがアンティオキア教会に来て、聖書に
基づいて、イエス・キリストを教えてくれたなら
ば、彼らは更にキリストに仕える者になる』
と、確信したのです。 バルナバはタルソスに行って、サウロを捜し出すと、アンティオキアにつれて来て、力を合わせて、アンティオキア教会を設立しました。

26節を見ますと、
「**二人は丸一年の間そこの教会に一緒にいて多くの人を教えた**」
とあります。 バルナバとサウロは、性格は真反対でした。 しかし、二人は、イエス様に結ばれていること、イエス・キリストの福音の伸展で一致し、互いの良さを惜しみなく出し尽くしました。
二人の信仰と、人柄に感化されたアンティオキア教会は、この後二人を異邦人伝道に送り出す働きを担う教会へと成長して行きました。 **教会の設立**、それは**福音宣教の拡大の為**です。 神様の御心は、全ての人に、イエス・キリストの永遠の命の福音が伝えられ、**一人でも多くの人が救われる事**です。

今日私達に与えられている賜物は、一人ひとり、それぞれ違います。 パウロはコリント第Ｉの手紙12章で、
『教会は、**イエス・キリストを頭**とする**体**であり、
一人一人はその部分です』
と言っています。 私達は互いを尊び合って、今一度福音の、**宣教拡大の使命**に立って祈り合い**協力し合って**、伝道に足を踏み出して行こうではありませんか。

お祈りをいたします。
恵深い天の父なる神様

真の救い主、イエス・キリストの御救いに入れてくださった事を感謝いたします。

この御救いの価値は、命にも勝るものです。
それなのに、私達はそれを、どれ位喜んでいるでしょうか 初代の聖徒達は、喜びに満たされ、福音を語らずにはいられませんでした。

ここに教会が立てられているのは**福音宣教の拡大のため**です。 私達は更に主を求め、福音の喜びに溢れさせて頂いて、福音を語り継ぐ者とならせてください。

救い主イエス・キリストのお名前によってお祈りを致します。
アーメン。